

在日アメリカ合衆国大使館大使公邸

所在地 東京都港区

建築用途 大使公邸

竣工 1931年

所有者 米国大使館

設計者 ヴァン・ビューレン・マ

ゴニグル（原設計）ア

ンソニー・レーモンド

（庭園設計）

RTKL アソシエイツ（改修工事）

施工者 (株)大林組

維持管理者 米国大使館総務部施設管理課



〈審査評〉「何時でも沢山の友人を招いてパーティーが出来る、手入れの行き届いた魅力的な大邸宅」というのが第一印象であった。立派で品位が漲り、それでいてくつろげる親しみのもてる環境である。大使館の大使公邸ならありそうな、人を威圧するような豪華さは感じさせない。マスターズ・ベッドルームまで見せていただいたが、これは予想よりはるかに質素な作りであった。全体にゆとりのある接客好きで家庭的な、アメリカ人の理想の住宅といった雰囲気の中で、審査員一同が大使館の環境がもつ「ホスピタリティ」に時のたつのを忘れた。しかも、昭和天皇がマッカーサー元帥を訪問された記念の居間、記念の椅子が今も使われているのは感慨無量であった。

1931年竣工といった時間の経過をまったく感じさせない新鮮なデザインであり、材質も色彩も美しい。今回、大規模な改修、というより復元工事を行った結果、65年前の竣工当時の魅力が復活したのであろう。かなり徹底した空調設備の更新や、左官・塗装・金物などの工事が全面的に行われ、それら工事の詳しい説明があった。説明者アンタンレ工氏の肩書は「ファシリティーズ・マネジメント・オフィサー」とあり、施設の企画から維持管理までを通じて施設を活用する総合戦略を司る、ファシリティ・マネージャーが存在することを知り、このBELCA賞がFMとつながっていることを実感した。

実は、この賞は「地域の人々に親しまれていること」を評価項目としており、一般の人々が接触できないこの種の建物には、この賞が馴染まないのではないかと懸念があった。しかし、この賞の対象が住宅のようにプライバシーを要する建物にも及ぶべきだと考えると、この評価項目は建物の種類に応じて緩やかに考えるべきだろうということに落ちついた。

この大使公邸は年に一回公開する予定があるとも聞いており、戦後の日米関係の重要な場面が広く知られているこの建物は「地域の誇り」でもあろう。

65年を経て、新築直後のように瑞々しい建築・庭園・設備は、この賞を受賞するにふさわしい。